

《論 説》

島崎藤村『千曲川のスケッチ』
における佐久の村々

神 立 春 樹

目 次

- 1 はじめに
- 2 『千曲川のスケッチ』における小諸の情景
- 3 『千曲川のスケッチ』に描かれた佐久の村々
- 4 『千曲川のスケッチ』における農村・農民把握の特質

1 はじめに

近代日本文学史に、その不朽の名声を留める島崎藤村は、若き日、信州小諸に7年間居住するが、この期間は、藤村文学史における一大転換期であるとされている。⁽¹⁾ 藤村自身、本稿で検討の対象とする紀行文集『千曲川のスケッチ』の「序」、あるいは「奥書」において、この信州小諸の生活について、そしてこの『千曲川のスケッチ』について、つぎのように記している。⁽²⁾

(1) 詩人から小説家へ、ロマンチズムからリアリズムへ、藤村に関する数多い論攷はこのようにとらえていると思われる。

なお、藤村についての研究・論評は数多いが、『千曲川のスケッチ』に関する研究はあまりなされていないという（宇野憲治『千曲川のスケッチ』、伊東一夫編『島崎藤村一課題と展望』1979年 明治書院 所収）。それらのなかで、伊東一夫『島崎藤村研究—近代文学研究方法の諸問題—』1969年 明治書院 は、『千曲川のスケッチ』を風土的自然、人間的自然を描写するものとして、その特質を検討しているが、後者として、農民の現実生活の把握における特質を検討している。また、第7編「文芸風土学的研究の問題」の5「佐久の風土と藤村の文芸」などにおいて、藤村文学の風土的基盤を検討している。また、林勇氏は、その編著『小諸時代の島崎藤村—詩より小説

『もつと自分を新鮮に、そして簡素にすることはないか。』

これは私が都会の空気の中から脱け出して、あの山国へ行つた時の心であつた。私は信州の百姓の中へ行つて種々なことを学んだ。田舎教師としての私は小諸義塾で町の商人や旧士族やそれから百姓の子弟を教へるのが勤めであつたけれども、一方から言へば私は学校の小使からも生徒の父兄からも学んだ。到頭七年の長い月日をあの山の上で送つた。私の心は詩から小説の形式を擇ぶやうに成つた。……（3～4 ページ 序）

実際私が小諸に行つて、飢餓渴いた旅人のやうに山を望んだ朝から、あの白雪の残つた遠い山々一浅間、牙齒のやうな山続き、陰影の多い谷々、古い崩壊の跡、それから淡い煙のやうな山巔の雲の群、すべてそれらのものが朝の光を帯びて私の眼に映つた時から、私はもう以前の自分ではないやうな気がしました。何んとなく私の内部には別のものが始まつたやうな気がしました。

これは後になつてからの自分の回顧であるが、それほどわたしも新しい渴望を感じてゐた。自分の第四の詩集を出した頃、わたしはもつと事物を正しく見ることを学ぼうと思ひ立つた。この心からの要求はかなりはげしかつたので、そのためにわたしは三年近くも黙して暮すやうになり、いつ始めるともなくこんなスケッチを始め、これを手帳に書きつけることを自分の日課のやうにした。……（587ページ 奥書）

この事物を正しく見ることを学ぼうとし、また種々のことを学んだなかで綴ったスケッチが『千曲川のスケッチ』である。その初版本の刊行は大正元（1912）年12月 左久良書房であるが、それを構成する12篇のそれぞれは、明治44（1911）年6月から大正元年8月にかけて『中学時代』（博文館）に発表されている。⁽³⁾ 藤村がこの書の舞台である信州佐久の地小諸の7年間の生活にピリオドを打って東京に去るのは明治38年であり、この書の発表はそれより後年であるが、著者自身の「奥書」によれば、小諸在住中に書かれている。信州小諸での、佐久の自然、風土、人々の生活に接するこの時期に、藤村の文

への歩み―』1970年 竹沢書店 第4章の第4節が「農家・農村への眼」となっているなど、藤村の農村・農民観を検討している。

(2) 本稿では、『藤村全集 第5巻』1967年 筑摩書房 によった。

(3) (2) と同一書 585ページ。

学者としての転換があったのであるが、この『千曲川のスケッチ』においては、事物は、すなわち、佐久の自然や風土、人々の生活は、どのように把握されているであろうか。本稿の課題は、この佐久の自然、風土、人々の生活についての描写について検討し、その時代的、地域的特質をどのように描出しているかを明らかにすることにある。

なお、筆者は、産業革命の進展にともなう地域民衆生活の変容という研究課題の遂行の一環として、「蘆花徳富健次郎『み、ずのたはこと』における東京近郊農村」なる小論を本誌前号に発表した⁽⁴⁾が、本稿はそれにひきつづくもので、「日本文学にあらわれた明治の農村」ともいべきシリーズの一つをなすものとなる。

2 『千曲川のスケッチ』における小諸の情景

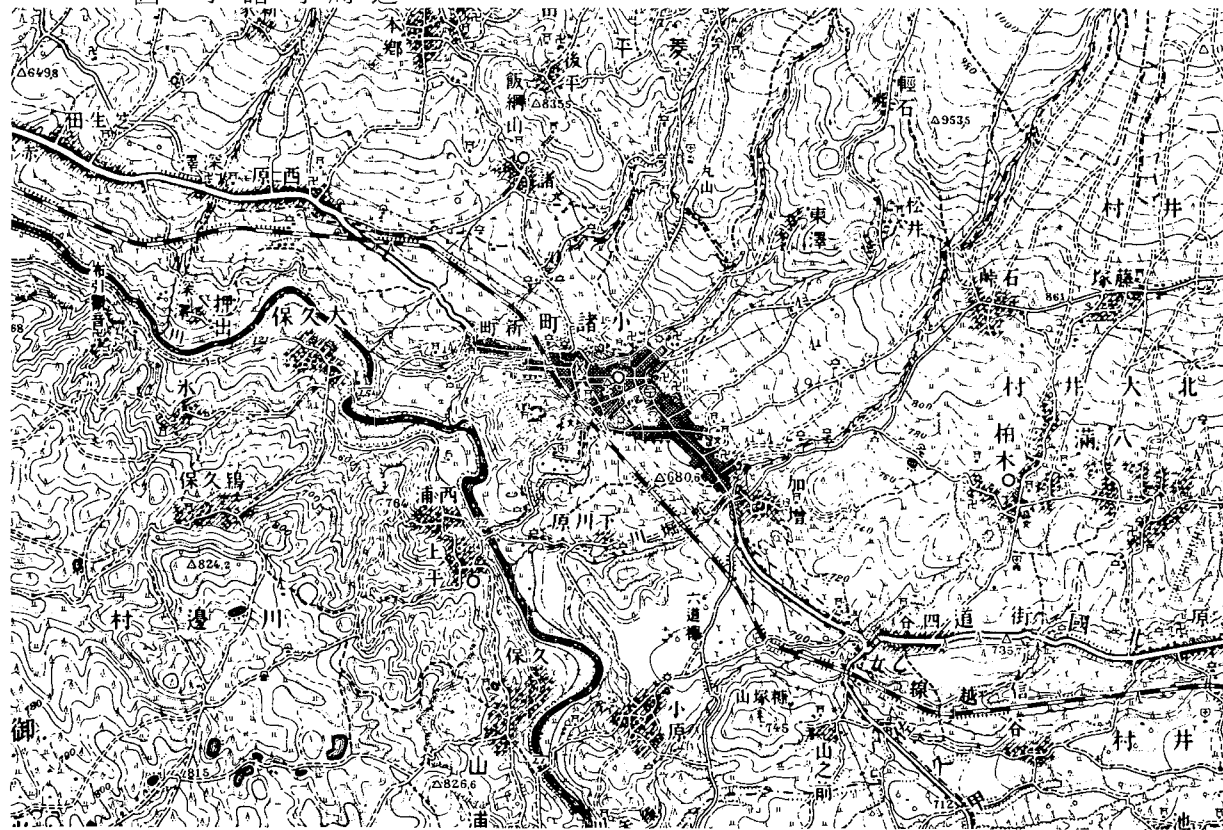
藤村が「到頭七年の長い月日をあの山の上で送つた。」というその所は、小諸町である。後年の書物には、「千曲川の東畔、浅間山の西麓にありて……、郡内屈指の邑に数へられ商況繁盛の地なり。」⁽⁴⁾「佐久地方と小県地方との接触点に当り、また仕入地たる関東に対しては入口であり、主要仕向地たる南北両佐久地方に対しては起点となるが故に佐久地方の第一の商業地をなし……」⁽⁵⁾などと記されている。『千曲川のスケッチ』と同じ時期に作成された「町是」にも、「我が小諸町ノ商業ニ於ケル東信ノ咽喉ヲ扼シテ要衝ヲ占メ地方ノ富ヲ一城ノ下ニ蒐メテ商權ヲ握レリ 然レドモ古来ノ習慣ト地勢ノ上トニ於テ半商半農ヲ以テ立チ内ヲ充タシテ外ニ当リ内外呼応シテ能ク其ノ宜シキヲ制シタリ……」⁽⁶⁾と記され、廃藩時、2万石の牧野氏所領のこの旧城下町は、佐久地方屈指の

(4) 『市町村別日本国勢総攬 中巻』 1934年 帝国公民教育協会 19ページ。

(5) 『日本地理風俗体系 4 中央及び北陸地方』 1936年 誠文堂新光社 737ページ。

(6) 小諸町役場編『長野県北佐久郡小諸町是』 1908年 33丁。

図 小諸町周辺



大日本帝国陸地測量部発行 5 万分の 1「上田」図幅 (大正元年測図・同 3 年製版), 「小諸」図幅 (大正元年測図・同 4 年製版) を使用した。

商業地なのである。明治40(1907)年に、現住戸数1,562戸、現住人口9,628人(男4,860、女4,768)である。⁽⁷⁾このような小諸であるが、『千曲川のスケッチ』にはつぎのように描写されている。

小諸の町は、「……一体、此の小諸の町には、平地といふものが無い。すこし雨でも降ると、細い川まで砂を押流すくらゐの地勢だ。」(29ページ)というように、浅間山麓の傾斜地にある。この小諸の町の情景を最もよく描写した箇所は、「其二」のうちの「麦畠」である。待ちに待つ春のおとずれは遅く、4月の20日頃になってようやく花が咲く。梅も、桜も、李もほとんど同時に花開き、懐古園の祭の4月25日頃満開となるが、おとずれの遅い春はまたたくまに過ぎ、早くも初夏の兆しをみせ、そして麦の熟する頃となる。「麦畠」はこの季節のものである。

青い野面には蒸すやうな光が満ちて居る。彼方此方の畠側にある樹木も活々とした新葉を着けて居る。雲雀、雀の鳴声に混つて、鋭いヨシキリの声も聞える。

火山の麓にある大傾斜を耕して作つた足辺の田畠はすべて石垣によつて支えられる。その石垣は今は雑草の葉で飾られる時である。石垣と共に多いのは、柿の樹だ。黄勝な、透明な、柿の若葉のかげを通るのも心地が好い。

小諸は斯の傾斜に添ふて、北国街道の両側に細長く発達した町だ。本町、荒町は光岳寺を堺にして左右に屈折した、主なる商家のあるところだが、その両端に市町、与良町が続いて居る。私は本町の裏手から停車場と共に開けた相生町の道路を横ぎり、古い士族屋敷の残つた袋町を通りぬけて、田圃側の細道へ出た。そこまで行くと、荒町、与良町と続いた家々の屋根が町の全景の一部を望むやうに見られる。白壁、土壁は青葉に埋れて居た。……

(19～20ページ)

このほかにも、この小諸の町の情景は随所に記されている。「もし君が斯のあたりの士族屋敷の跡を通つて、荒廃した土堀、礎ばかり残つた桑畠などを見、離散した多くの家族の可傷しい歴史を聞き、振返つて本町、荒町の力に町人の

(7) (6)と同一書 付録諸表。

繁昌を望むなら、『時』の歩いた恐るべき足跡を思はずに居られなからう。」

(24ページ)、と旧土族町を記し、「其八」のうちの「一ぜんめし」には、家から鹿島神社の横手にいたる町筋の様子が記される。馬場裏の往来近くの仕立屋、少し先のカステラや羊羹を店頭に並べる菓子屋、髪の高い売ト者、大手通りの紺のれんを軒先に掛けた染物屋、それを右手に見て鹿島神社の方に行くところに按摩を渡世にする頭を丸めた盲人、駒鳥だの瑠璃だのそのほか小鳥がかごの中でさえずっている……鳥屋……、その先に一ぜんめしの揚羽屋がある(89ページ)。

ここ小諸は商業地である。最大の販売農産物は繭である。その繭を買い集めに、各地の商人が集まる。「秤を腰に差して麻袋を負つたやうな人達は、諏訪、松本あたりから此の町へ入込んで来る。旅舎は一時繭買の群で満たされる。左様いふ手合が、思ひ思ひの旅舎を指して繭の収穫を運んで行く光景も、何となく町々に活気を添へるのである。」(34ページ)。

この小諸の商人は、「殊に商業道德に厚いこと信州第一である。」⁽⁸⁾といわれるが、藤村も上田町の商人との比較のうちに、「……十年も昔に流行つたやうな紋付羽織を祝儀不祝儀に着用して、それを恥ともせず、否むしろ粗服を誇りとするが小諸の旦那衆である。……要するに、表面は空しく見せて其实豊かに、表面は無愛想でも其实親切を貴ぶのが小諸だ。」(107ページ)、「陰気で重々しく」、「小諸の商人は買ひたか御買ひなさいといふ無愛想な顔付をして居て、それで割合に良い品を安く売る」(107ページ)、と記している。「其十一」のなかの「柳田茂十郎」は、佐久地方の商人として名高く、諸国まで名を知られた、極端に佐久かたぎを発揮した柳田茂十郎について記している。(178～9ページ)。

藤村が小諸に来たのは、小諸義塾の教師としてであるが、この小諸義塾は、明治26年11月25日に設立された。小諸には中等教育の学校がなく、その設立

(8) (5)と同一書 737ページ。

がのぞまれていたが、「米国マスター・オブ・アーツ木村熊二氏ノ来遊ヲ迎ヘテ有志者相謀リ中等程度ノ私立学校ヲ設立セント企図シ其ノ議終ニ熟シテ此ノ開校ヲ見ルニ至⁽⁹⁾」ったものであり、これ自体教育への熱誠さを示すものであるが、「其十一」の「山に住む人々の二」には、この国（信州）が、学問の普及ということを国の誇りとするものの一つである、として、多くの児童を収容する大校舎の建物をこの地方では見ることができ、小諸でも、町費の大部分を注いで、他の町に劣らないほどの大校舎を建築した、「その高い玻璃窓は町の額のところに光つて見える。」と記している。（129ページ）

同じく「山に住む人々の一」には、飯山地方と比較した、小諸あたりの信仰を記している。飯山地方は土地の人が信心深く、この町だけに二十何か所の寺がある。言葉づかいからして高原の方とはちがう、と「其十一」で記しているが（127ページ）、「斯ういふことは高原の地方にはあまり無いことだ。第一左様いふ土地柄で無いし、左様いふ歴史の背景も無いし法の残燈を高く掲げて居るやうな老僧のやうな人も見当らない。私は小諸辺で幾人かの僧侶に逢つて見たが、実際社会の人達に逢つて居ると殆んど変りが無いやうに思つた。養蚕時が来れば、寺の本堂の側に蚕の棚が釣られる。僧侶も労働して、長い冬籠の貯へを造らなければ成らない。」（128ページ）。

「其十二」に「御辞儀」というのがある。校長が講演のときに、医者仲間の無能を攻撃したという事件がおこり、校長にかわって謝罪させられるという一件を記したものだ。ある晩、岡源という料理屋からの使いが、来てくれるという内容の警察署長の手紙をもってきた。行くと、岡源の二階には小諸医会の面々が集まっていて、藤村に、校長にかわって先の失言を謝罪してもらいたいという。謝罪していいものかどうか判断もつきかねているような形勢を見てとった署長が、いきなり席をはなれ、皆の方へ向いてお辞儀をしたので、つい頭を下げてしまう。「御辞儀をして斯の二階を引取つた時、つくづ

（9） （6）と同一書 21丁。

く私は田舎教師の勤めもツライものだと思つた。」と記している。さらに翌日、校長にそのことを話すと、「先生は先生で忌々しきうに、そんな御辞儀には及ばなかつた」といわれ、「実に、損な役廻りを勤めたものだ。」と記している。(149ページ)

これに対して、時々立ち寄ってたき火にあててもらふ「一ぜんめし」の揚羽屋は、「下層の労働者、馬方、近在の小百姓なぞが、酒を温めて貰ふところだ。」が、「斯ういふ暗い屋根の下も、煤けた壁も、汚れた人々の顔も、それほど私には苦に成らなく成つた。私は往来に繋いである馬の鳴声なぞを聞きながら、そこで凍えた身体を温める。荒くれた人達の話や笑声に耳を傾ける。次第に心易くなつて見れば、亭主が一ぜんめしの看板を張替へたからと言つて、それを書くことなぞまで頼まれたりする。」(90ページ)、という叙述がある。先の「御辞儀」では、町の有力者に愛想をつかせているように読みとれるが、ここには、町の普通の人々との共感を読み取ることができる。

3 『千曲川のスケッチ』に描かれた佐久の村々

(1) 佐久の農村とのかかわり

藤村の佐久地方の農村とのかかわりは、一つには小諸義塾の生徒を通じてである。「私の教へて居る生徒は小諸町の青年ばかりでは無い。平原、小原、山浦、大久保、西原、滋野、其他小諸附近に散在する村落から、一里も二里もあるところを歩いて通つて来る。斯ういふ学生は多く農家の青年だ。学校の日課が済むと、彼等は各自の家路を指して、松林の間を通り鉄道の線路に添ひ、あるひは千曲川の岸に随いて、蛙の声などを聞きながら帰つて行く。山浦、大久保は対岸にある村々だ。牛蒡、人参などの好い野菜を出す土地だ。滋野は北佐久の領分でなく、小県の傾斜にある農村で、その附近の村々から

通つて来る学生も多い。」(7~8ページ)と生徒達の家のある村々のひろがりを書いている。この生徒達を通じて佐久の村々を見聞していく。ここの箇所では、Sという小原村から通っている学生の家の訪問を記している。「私は小原のやうな村が好きだ。そこには生々とした樹蔭が多いから。それに、小諸からその村へ通ふ畠の間の平かな道も好きだ。」。Sの家はかなり大きい農家で父も兄も土地では人望がある。近頃牛乳屋を始めた。乳牛を三頭ばかり飼ひ、乳をしぼり、びんづめにし、晩、配達に小諸をさして出かける。(8~9ページ)

ある日、小諸から汽車で田中まで行き、そこから1里ばかり小県の傾斜をのぼったところにある根津村に水彩画家B君を尋ねたときに、卒業生Oの家に立ち寄る。Oの母や姉にも会う。「Oの母は肥満した、大きな体格の婦人で、赤い艶々とした頬の色なぞが素朴な快感を与へる。一体千曲川の沿岸では女性がよく働く、随つて気象も強い。……私は又、斯の土地で、野蛮な感じのする女に遭遇ふこともある。Oの母には其様な荒々しさが無い。何しろ斯の婦人は驚くべき強健な体格だ。Oの姉も労働に慣れた女らしい手をもつて居た。」(10ページ)。

この生徒をつれての修学旅行などの旅行がある。ここには、千曲川の上流をさして出発し、八ヶ岳のすそから甲州へ下つて甲府に出、そこから諏訪へ回り、和田の方から小諸へ戻つてくる、という、蓼科、八ヶ岳の長い山脈の周囲を大きく一周する、1週間もの秋の修学旅行が記されている。千曲川から野辺山が原へかけてのかつての旅の記憶をもよびおこしつつ、この旅での観察を記録する。岩村田町あたりの平坦な、広々としたなかを貫く甲州街道、黄ばんだ、秋らしい南佐久のひろがり、千曲川がしだいに谷深くなつていく様子、こういうことが記される。そして、軍馬の産地である野辺山あたりの農村を見る。「こゝは一頭や二頭の馬を飼はない家は無い程の産馬地だ。馬が土地の人の主なる財産だ。娘が一人で馬に乗つて、暗い夜道を平気で通る程の、荒い質朴な人達が住むところだ。」「風呂桶が下水の溜の上に設けてあるといふことは一いかに斯の辺の人達が骨の折れる生活を営むとはい

へー又、それほど生活を簡易にする必要があるとはいへー来て見る度に私を驚かす。こゝから更に千曲川の上流に当つて、川上の八ヶ村といふがある。その辺は信州の中でも最も不便な、白米は唯病人に頂かせるほどの、貧しい、荒れた山奥の一つであるといふ。」(65～66ページ)。

「暇さへあれば私は千曲川沿岸の地方を探るのを楽しみとした。」(117ページ) といっているが、この探索が農村観察の機会となっている。また、ある年のクリスマスの夜とその翌日の長野でのひととき (101～104ページ)、正月元日の上田の町はずれの屠牛場見物 (106～113ページ)、1月13日からの、途中千曲川の川舟を使つての飯山までの旅 (117～124ページ)、このような旅行からえられるそれぞれの地の印象との比較のうちに佐久の特徴がつかまれていく。周辺の散策、烏帽子山麓の牧場 (10～13ページ)、夷講の翌日の山歩きと清水の山小屋での1泊 (90～98ページ)、黒斑山のすぐそこにある山番小屋 (55～60ページ) が、山の人々の生活を垣間見る機会であつたことはいふまでもない。

このようにして観察した自然と生活の把握を見よう。

(2) 佐久の農村の四季

春にはじまり夏、秋、冬、そして再びめぐりくる春という、四季を12篇に描写したこのスケッチは、そのときどきの季節の、ことにその美しさを随所に記している。その一端は、「麦畠」の引用にみることができる。ここでは、むしろこの地のきびしさを描いた箇所を検討しよう。

「浅間山麓の高原と、焼石と、砂と、烈風の中からこんなスケッチが生れた。」(588ページ 奥書)、『『のつべい』と称する土は乾いて居て灰のやう。」(11ページ)、「火山の麓にある大傾斜を耕して作つた是辺の田畠はすべて石垣によつて支へられる。」(20ページ)、などと自然条件のきびしさを記している。そして、「小諸のやうな砂地の傾斜に石垣を築いて其上に骨の折れる生活を営む人達は、勢ひ質素に成らざるを得ない。寒い気候と痩せた土地とは自然に勤勉な人達を作り出した。こゝの畠からは上州のやうな豊富な野菜は受取れない。

堅い地大根の沢庵を噛み、朝晩味噌汁に甘んじて働くのは小諸である。」(107ページ) というように、この自然条件のきびしさが、人々の質素、勤勉な生活を導きだすものとしている。

このように佐久の自然のきびしさを描いた箇所は随所にあるが、最も端的な箇所をあげてみよう。

毎年十月の二十日といへば、初霜を見る。雑木林や平坦な耕地の多い武蔵野へ来る冬、浅々とした感じの好い都会の霜、左様いふものを見慣れて居る君に、斯の山の上の霜をお目に掛けたい。こゝの桑畠へ三度や四度もあの霜が来て見給へ、桑の葉は忽ち縮み上つて焼け焦げたやうに成る、畠の土はボロボロに爛れて了ふ……見ても可恐しい。猛烈な冬の威力を示すのは、あの霜だ。……

十月末のある朝のことであつた。私は家の裏口へ出て、深い秋雨のために色づいた柿の葉が面白いやうに地へ下るのを見た。肉の厚い柿の葉は霜のために焼け損はれたり、縮れたりはないが、朝日があたつて来て霜のゆるむ頃には、重さに堪へないで脆く落ちる。しばらく私はそこに立つて、茫然と眺めて居た位だ。そして、其朝は殊に烈しい霜の来たことを思つた。(73ページ)

十一月に入つて急に寒さを増した。天長節の朝、起出して見ると、一面に霜が来て居て、桑畠も野菜畠も家々の屋根も皆な白く見渡される。裏口の柿の葉は一時に落ちて、道も埋れる許りであつた。すこしも風は無い。それで居て一葉二葉づゝ静かに地へ下る。屋根の上の方で鳴く雀も、いつもよりは高くいさましうに聞えた。

空はドンヨリとして、霧のために全く灰色に見えるやうな日だつた。私は勝手元の焚火に凍えた両手をかざしたく成つた。足袋を穿いた爪先も寒くしみて、いかにも可恐しい冬の近よつて来るを感じた。斯の山の上に住むものは、十一月から翌年の三月まで、殆んど五ヶ月の冬を過ぎねば成らぬ。その長い冬籠りの用意をせねば成らぬ。

(74ページ)

木枯が吹いて来た。

十一月中旬のことであつた。ある朝、私は潮の押寄せて来るやうな音に驚かされて、眼が覚めた。空を通る風の音だ。時々それが沈まつたかと思ふと、急に復た吹きつける。戸も鳴れば障子も鳴る。殊に南向の障子にはバラバラと木の葉のあたる音がして其間に

は千曲川の河音も平素から見るとずっと近く聞えた。

障子を開けると、木の葉は部屋の内までも舞込んで来る。空は晴れて白い雲の見えるやうな日であつたが、裏の流のところに立つ柳などは烈風に吹かれて髪を振ふやうに見えた。枯々とした桑畠に茶褐色に残つた霜葉なども左右に吹き靡いて居た。

其日、私は学校の往と還とに停車場前の通を横ぎつて、真綿帽子やフランネルの布で頭を包んだ男だの、手拭を冠つて両手を袖に隠した女だのの行き過ぎるのに遇つた。往来の人々は、いづれも鼻汁をすゝつたり、眼側を紅くしたり、あるひは涙を流したりして、顔色は白ツぼく、頬、耳、鼻の先だけは赤く成つて、身を縮め、頭をかゝめて、寒さうに歩いて居た。風を背後にした人は飛ぶやうで、風に向つて行く人は又、力を出して物を押すやうに見えた。

土も、岩も、人の皮膚の色も、私の眼には灰色に見えた。日光そのものが黄ばんだ灰色だ。その日の木枯が野山を吹きまくる光景は凄まじく、烈しく、又勇ましくもあつた。樹木といふ樹木の枝は撓み、幹も動揺し、柳、竹の類は草のやうに靡いた。柿の実で梢に残つたのは吹き落された。梅、李、桜、樺、銀杏などの霜葉は、その一日で悉く落ちた。そして、そここゝに聚つた落葉が風に吹かれては舞ひ揚つた。急に山々の景色は淋しく、明るく成つた。

(74～75ページ)

「其七」のうちの「落葉」一、二、三である。冬の訪れのすさまじさが描かれている。

……一月の二十七日あたりから三十一日を越え、二月の六日頃までは、殆んど寒さの絶頂に達した。山の上に住み慣れた私も、ある日は手の指の凍り縮むのを覚え、ある日は風邪のために発熱して、気候の激烈なるに驚かされる。降つた雪は北向の屋根や庭に凍つて、連日溶くべき気色も無い……私は根太の下から土と共に持ち上つて来た霜柱の為に戸の閉らなくなつた古い部屋を見たことがある。北向の屋根の軒先から垂下る氷柱は二尺、三尺に及ぶ。身を包んで屋外を歩いて居ると氣息がかゝつて外套の襟の白くなるのを見る。……

君は牛乳の凍つたのを見たことがあるまい。淡い緑色を帯びて、乳らしい香もなくなる。こゝでは鶏卵も氷る。それを割れば白味も黄味もザクザクに成つて居る。台処の流

許に流れる水は皆な凍り着く。葱の根、茶滓まで凍り着く。明窓へ薄日の射して来た頃、出刃庖丁か何かで流許の氷をかんかん打割るといふは暖い国では見られない図だ。夜を越した手桶の水は、朝に成つて見ると半分は氷だ。それを日にあて、氷を叩き落し、それから水を汲入れるといふ始末だ。沢庵も、菜漬も皆な凍つて、嚙めばザクザク音がする。時には漬物まで湯ですゝがねばならぬ。奉公人の手などを見れば、黒く荒れ、皮膚は裂けてところどころ紅い血が流れ、水を汲むには頭巾を冠つて手袋をはめてやる。板の間へ掛けた雑巾の跡が直に凍る朝なぞはめづらしくない。夜更けて、部屋々々の柱が凍み割れる音を聞きながら読書でもして居ると、実に寒さが私達の骨まで浸透るかと思はれる……

雪の襲つて来る前は反つて暖かだ。……そのかはり雪の積つた後と来ては、堪へがたいほどの凍み方だ。雪のある田畠へ出て見れば、まるで氷の野だ。斯うなると、千曲川も白く氷りつめる。……

(143～144ページ)

「其十二」のうちの「路傍の雑草」の箇所であるが、冬の最も寒い時期の痛いような寒さが描かれている。

(3) 佐久の農業

この佐久地方のこの時期の農業の一般的状況はつぎのようになる。北佐久郡についてみると、田5793町9反、畑6719町3反と、畑がちである。土性は「川東地方は多く浅間の火山灰土を以て覆はれ、土質輕鬆地力に乏し。然れども耕耘容易にして、通気排水によろしく、川西地方は概して粘土より構成せられ、土質粘重耕耘容易ならず。通気排水も亦佳ならざる状況を呈せり。幸いに地力稍豊沃、従つて米質頗佳良なりと称せらる。而して千曲川の両岸に発達せる沖積地は、郡内最良の壤土にして、二毛作の完きところ少からず。郡内原野の大なるもの、概ね荒蕪に委せらるゝと雖も、ひとり御牧原は其土質粘重なるを以て、近来池塘を築きて天水を湛え、水田を開くの方法案出せられしより、田園大に開けたり。」とある。⁽¹⁰⁾ 水田には水稻が栽培されるが、反収は、明治42～45年の平均で1.617石で高くない。⁽¹¹⁾ 畑では、大麦、小麦、小豆、

蕎麦など、穀豆類の作付が大きい。そして、著しいのが、養蚕である。⁽¹²⁾

ここで、佐久地方の産業構成を物産の県外移出入の状況からみておこう。時点は明治30年についてである。この年、長野県全体についてみると、移出額は1820万7488円、移入額1958万9627円で、161万1827円の移入超過である。移出の最大は蚕糸で79.9%を占め、第2位蚕種の4.8%以下と隔絶した大きさである。他方、移入は、織物類22%、繭20.6%、米14.7%、魚類10.1%などとなっている。生糸が圧倒的な移出品であり、他方その原料の繭が単独では最大の移入品となっているこの移出入の構成は、まさしく、この長野県の産業構造に対応するものであり、蚕糸業県長野の特質を示すものである。繭が移入品中の最大であるが、このことは県内に養蚕が行なわれなかったことを意味するのではない。米が繭に次ぐ第2の移入品であり、この米をはじめとする普通農産物が16%にも達することは、養蚕業の拡大により米をはじめとする普通農産物の生産拡大が制約され、自給できないという、そのような農業における養蚕業の著しい展開を示すものである。この長野県の特徴を最も端的に示すのは諏訪郡であって、移出中の蚕糸の比率は実に95.4%、移入額中の繭・蚕種の割合は58.9%、となっている。佐久はこのような中心郡には及ばないが、蚕糸の移出額中のウエイトは71.3% (南佐久郡)、50% (北佐久郡) と、ここも蚕糸業郡であることにはかわりはない。⁽¹³⁾そして、この製糸業に原料繭の生産がひろく行なわれたことはいうまでもない。

この佐久地方のウエイトの高い養蚕業について、藤村は、「こゝでは男女が烈しく労働する。君のやうに都会で学んで居る人は、養蚕休みなどといふことを知るまい。外国の田舎にも、小麦の産地などでは、学校に収穫休みと

(10) 北佐久郡役所編『北佐久郡志』1915年 同所 539ページ。

(11) 同上書 141～142ページ。

(12) 同上書 156～159ページ、162～163ページ。

(13) 田中雅孝「産業革命期における長野県の産業編成と商品流通」『信濃』36巻11号 1984年 808～812ページ。

いふものがあるとか。何かの本でそんなことを読んだことがあつた。私たちの養蚕休みは、それに似たやうなものだろう。多忙しい時季が来ると、学生でも家の手伝ひをしなければ成らない。」(8ページ)、「養蚕時が来れば、寺の本堂の側に蚕の棚が釣られる。僧侶も労働して、長い冬籠の貯へを造らなければ成らない。」(128ページ)、「此の町で養蚕をしない家は、指折るほどしかない。寺院の僧侶すらそれらを一年の主なる収入に数へる。私の家では一度も飼つたことが無いが、それが不思議に聞える位だ。斯ういふ土地だから、暗い蚕棚と、襲ふやうな臭気と、蚕の睡眠と、桑の出来不出来と、ある時は殆んど徹夜で働いて居る男や女のことを想つて見て貰はなければ、それから後に来る祇園祭の楽しさを君に伝えることが出来ない。」(33~34ページ)などと記している。そして、「多くの商人は殊に祭の賑ひを期待する。養蚕から得た報酬がすくなくも此の時には費されるのであるから。」(34ページ)、そして、「こゝは養蚕地だから、蚕祭といふのをする。その日は繭の形を米の粉で造り、笹の葉に載せて祭るのだ。」(148ページ)というように、人々に喜びをもたらし、活気をもたらすものとなっていることを描いている。

④ 佐久の農村の人々の生活

藤村は、「君は何程私が農夫の生活に興味を持つかといふことに気付いたであらう。私の話の中には、幾度か農家を訪ねたり、農夫に話し掛けたり、彼等の働く光景を眺めたりして、多くの時を送つたことが出て来る。それほど私は飽きない心地で居る。そして、もつともつと彼等をよく知りたいと思つて居る。見たところ、Open で、質素で、簡単で、半ば野外にさらけ出されたやうなのが、彼等の生活だ。しかし彼等に近づけば近づくほど、隠れた、複雑な生活を営んで居ることを思ふ。同じやうな服装を着け、同じやうな農具を携へ、同じやうな耕作に従っている農夫等。譬へば、彼等の生活は極く地味な灰色だ。その灰色に幾通りあるか知れない。私は学校の暇々に、自分でも鋤を執つて、すこしばかりの野菜を作つて見て居るが、どうしても未だ彼等の

心には入れない。」(80～81ページ)と述べ、農民の生活に強烈な関心をもって
いることを示している。それでは、どのように農民を捉えているかをみよう。

「一体千曲川の沿岸では女性がよく働く、随つて気象も強い。……私は又、
斯の土地で、野蛮な感じのする女に遭遇ふこともある。」(10ページ)、「斯の
山の上で、私はよく光沢の無い茶色な髪娘に逢ふ。どうかすると、灰色に
近いものもある。草葺の小屋の前や、桑畠の多い石垣の側なぞに、左様いふ娘が
立つて居るさまは、いかにも荒い土地の生活を思はせる。『小さな御百姓なん
つものは、春秋働いて、冬に成ればそれを食ふだけのものでござす。まるで鉄
砲虫一食つては抜け、食つては抜け』 学校の小使が私に斯様なことを言
つた。」(9ページ)というように、佐久の農民、女性を描写している。

「地を鋤くもの、豆を蒔くもの、肥料を施すもの、土をかけるもの、斯う
四人でやるが、土は焼けて火のやうに成つて居る、素足で豆蒔は出来かねる、
草鞋を穿いて漸くそれをやるといふ。……麦一ツカ―九十坪に、粉糠一斗の
肥料を要するとか。それには大麦の殻と、刈草とを腐らして、粉糠を混ぜて、
麦畠に撒くといふ。麦は矢張小作の年貢の中に入つて、夏の豆、蕎麦なぞが
百姓の利得に成るとのことであつた。」(17ページ)、「畠の間には遊んで居る
子供もあつた。手甲をはめ、浅黄の襷を掛け、腕をあらわにして、働いて居
る女もあつた。草土手の上に寝かされた乳飲児が、急に眼を覚まして泣出す
と、若い母は鍬を置いて、その児の方へ駆けて来た。そして、畠中で、大
きな乳房の垂下つた懷をさぐらせた。……草土手の雑草を刈取つてそれを
背負つて行く老婆もあつた。」(20～21ページ)、「青木村といふところで、いか
に農夫等が苦勞するかを見た。彼等の背中に木の葉を挿して、それを僅かの
日除としながら、田の草を取つて働いて居た。私なぞは洋傘でもなければ歩
かれない程の熱い日ざかりに。」(50ページ)、「手廻しの好い農夫は既に収穫を
終つた頃だ。近いところの田には、高い土手のやうに稲を積み重ね、穂をこ
き落した藁はその辺に置き並べてあつた。二人の丸髷に結つた女が一人の農夫
を相手にして立ち働いて居た。男は雇はれたものと見え、烏打帽に青い筒袖と

いふ小作人らしい風体で、女の機嫌を取り取り糶の俵を造つて居た。……烏打帽は鍬を執つて田の土をすこしナラし始めた。女二人が錯々と糶を振つたり、稲こきをしたりして居るに引替へ、斯の雇はれた男の方ははかばかしく仕事もしないといふ風で、すこし働いたかと思ふと、直に鍬を杖にして、是方を眺めてはボンヤリと立つて居た。……私の眼界にはよく働く男が二人までも入つて来た。一人は近くにある田の中で、大きな鍬に力を入れて、土を起し始めた。今一人はいかにも背の高い、痩せた、年若な農夫だ。高い石垣の上の方で、枯草の茶色に見えるところに半身を顕して、モミを打ち始めた。遠くて、その男の姿が隠れる時でも、上つたり下つたりする槌だけは見えた。そして、その槌の音が遠い砧の音のやうに聞えた。……急に私の背後から下駄の音がして来たかと思ふと、ぱつたり立止つて、向ふの石垣の上の方に向いて呼び掛ける子供の声がした。見ると、茶色に成つた桑畠を隔て、親子二人が収穫を急いで居た。子供はお茶の入つたことを知らせに来たのだ。信州人ほど茶好きな人達も少なからうと思ふが、その子供が復た駆出して行つた後でも、親子は時を惜むといふ風で、母の方は稲穂をこき落すに余念なく、子息はその糶を叩く方に廻つてすこしも手を休めなかつた。遠く離れては居たが、手拭を冠つた母の身を延べつ縮めつするさまも、子息のシャツ一枚になつて後ろ向きに働いて居るさまも、よく見えた。」(78～80ページ)、というように、きびしい農作業の様子を描いている。

この働く農民の様子は随所に描かれているが、それを緊迫感をもって描いたのは「収穫」である。

ある日、復た私は光岳寺の横手を通り抜けて、小諸の東側にあたる岡の上に行つて見た。

午後の四時頃だつた。私が出た岡の上は可成眺望の好いところで、大きな波濤のやうな傾斜の下の方に小諸町の一部が瞰下される位置にある。私の周囲には、既に刈乾した田だの未だ刈取らない田だのが連なり続いて、その中である二家族のみが残つて収穫を

急いで居た。

雪の来ない中に早く、耕作に従事する人達の何かにつけて心忙しさが思はれる。私の眼前には胡麻塩頭の父と十四五ばかりに成る子とが互に長い槌を振上げて粃を打つた。その音がトントンと地に響いて、白い土埃が立ち上つた。母は手拭を冠り、手甲を着けて、稲の穂をこいては前にある箕の中へ落して居た。その傍には、父子の叩いた粃を篩にすくひ入れて、腰を曲め乍ら働いて居る、黒い日に焼けた顔付の女もあつた。それから赤い樺掛に紺足袋穿といふ風俗で、粃の入つた箕を頭の上に載せ、風に向つてすこしづゝ振り落すと、その度に糝と塵埃との混り合つた黄な煙を送る女もあつた。

日が短いから、皆な話もしないで、塵埃だらけに成つて働いた。岡の向ふには、稲田や桑畠を隔て、夫婦して笠を冠つて働いて居るのがある。殊にその女房が箕を高く差揚げ風に立て、居るのが見える。風は身に染みて、冷冷として来た。私の眼前に働いて居た男の子は稲村に預けて置いた袖なし半天を着た。母も上着の塵埃を払つて着た。何となく私も身体がゾクゾクして来たから、尻端折りを下して、着物の上から自分の膝を摩擦しながら、皆なの為ることを見て居た。

鍬を肩に掛けて、岡づたひに家の方へ帰つて行く頬冠りの男もあつた。鎌を二挺持ち、乳呑児を背中に乗せて、『おつかれ』と言ひつゝ通過ぎる女もあつた。

眼前の父子が打つ槌の音はトントンと忙しく成つた。

『フン』、『ヨウ』の掛声も幽かに泄れて来た。そのうちに、父はへなへなした俵を取出した。腰を延ばして塵埃の中を眺める女もあつた。田の中には黄な粃の山を成した。

其時は最早暮色が薄く迫つた。小諸の町つゞきと、彼方の山々の間にある谷には、白い夕靄が立ち籠めた。向ふの岡の道を帰つて行く農夫も見えた。

私はもうすこし辛抱して、と思つて見て居ると、父の農夫が粃をつめた俵に縄を掛けて、それを負ひながら家を指して運んで行く様子だ。今は三人の女が主に成つて働いた。岡辺も暮れかゝつて来て、野面に居て働くものも無くなる。向ふの田の中に居る夫婦者の姿もよく見えない程に成つた。

光岳寺の暮鐘が響き渡つた。浅間も次第に暮れ、紫色に夕映した山々は何時しか暗い鉛色と成つて、唯白い煙のみが暗紫色の空に望まれた。急に野面がパツと明るく成つたかと思ふと、復た響き渡る鐘の音を聞いた。私の側には、青々とした菜を負つて帰つて行く子供もあり、男とも女とも後姿の分らないやうなのが足速に岡の道を下つて行くも

あり、左様かと思ふと、上着のまゝ細帯も締めないで、まるで帯とけひろげのやうに見える荒くれた女が野獣のやうに走つて行くのもあつた。

南の空には青光りのある星一つあらはれた。すこし離れて、また一つあらはれた。斯の二つの星の姿が紫色な暮の空にちらちらと光を見せた。西の空はと見ると、山の端は黄色に光り、急に焦茶色と変り、沈んだ日の反射も最後の輝きを野面に投げた。働いて居る三人の女の頬冠り、曲めた腰、皆な一時に光つた。男の子の鼻の先まで光つた。最早稲田も灰色、野も暗い灰色に包まれ、八幡の杜のこんもりとした櫨の梢も暗い茶褐色に隠れて了つた。

町の彼方にはチラチラ燈光が点き始めた。岡つゞきの山の裾にも点いた。

父の農夫は引返して来て復た一俵負つて行つた。三人の女や子供は急ぎ働いた。

『暗くなつて、いけねえナア。』と母の子をいたはる声がした。

『箒探しな一箒一』

と復た母に言はれて、子はいろろと田の中を捜し歩いた。

やがて母は箒で糶を掃き寄せ、藎を揚げて取り集めなどする。女達が是方を向いた顔もハツキリとは分らないほどで、冠つて居る手拭の色と顔とが同じほどの暗さに見えた。

向ふの田に居る夫婦者も、まだ働くと見えて、灰色な稲田の中に暗く動くさまが、それとなく分る。

汽笛が寂しく響いて聞えた。風は遽然私の身にしみて来た。

『待ちろ待ちろ』

母の音がする。男の子はその側で、姉らしい女と共に糶を打つた。彼方の岡の道を帰る人も暗く見えた。『おつかれでござす』と挨拶そこそこに急いで通過ぎるものもあつた。そのうちに、三人の女の働くさまもよくは見えない位に成つて、冠つた手拭のみが仄かに白く残つた。振り上ぐる槌までも暗かつた。

『藎をまつめろ。』

といふ声もその中で聞える。

私が斯の岡を離れようとした頃、三人の女はまだ残つて働いて居た。私が振返つて彼等を見た時は、暗い影の動くとしか見えなかつた。全く暮れ果てた。(82~85ページ)

晩秋の夕暮の慌しい農作業の様子が簡潔に描かれている。人々の数少なく

交される言葉にも切迫感があふれている。

農民の生活はいくつかの箇所描かれている。

その一つが「其七」のうちの「農夫の生活」である。ここには、ある日、一農家の農作業の傍らにいて、彼らと話を交す様子が記されている。学校の小使の辰さんの家の人々で、彼とその父親、弟の三人である。麦畑の「サク」を起こす作業をしている。休み休みいろいろな話をする。雨、風、日光、鳥、虫、雑草、土、気候、そういうものがなくてかなわぬものでありながら、また百姓が敵として戦わねばならないものもある、ということから、この辺の百姓が苦しむといういろいろな雑草の話である。水おもだか、えご、夜ばいづる、山こぼう、つる草、よもぎ、へびいちご、あけびのつる、がくもんじ（天王草）その他の田の草取るときの雑草である。辰さんは田のなかから、ひとかたまりの土を取って来て、青い毛のような草の根が隠れていることを示し、「ひやうひやう草」とかいった。稲の話もでる。『大抵の御百姓に、斯の稲は何だなんて聞いても、名を知らないのが多い位に、沢山いろいろと御座います。』とのことであるが、この稲の女穂、男穂のこと、このあたりは浅間のすそで砂地だから稲も良いものは作れないこと、を辰さんの父親は聞かせる。小麦畑へ来る鳥、稲田を荒らすという虫類の話もでた。さらに、「地獄蒔」といって、麦の種をまくのに地勢に応じたことを考える。小諸は東西の風をうけるので、南北に「ウネ」をつくり、日あたりのよさ、風のための穂のすれ落ちをさけるようにする。このように絶えず工夫していることも語った。『しかし、上州の人に見せたものなら、斯様なことでよく麦が取れるツて、魂消られます。』と辰さんの父親はいった。この人は、63歳になるが、まだ耕作を休まずにいるという『お百姓なぞは、能の無いものの為るこんです……』と自らあざけるようにいった。（80～82ページ）

「其十一」のうちの「小作人の家」もその一つである。同じく辰さんの家の様子を記すが、辰さんは「小使のかたはら、自分の家では小作を作つて居る。それは主に年老いた父と、弟とがやつて居る。純小作人の家族だ。学

校の日課が終つて、小使が教室々々の掃除をする頃には、頬の紅い彼の妻が子供を背負つてやつて来て、夫の手伝ひをすることもある。……休みの時間になると、私は斯の小使をつかまへては、耕作の話聞いて見る。」(17ページ)。先に6月の豆まきの苦勞話を聞き、麦作の話聞いたのはこの男からであった。

この「小作人の家」(133～139ページ)は、小作人の小作米納入日の様子を記す。その家は、上に出た学校の小使の辰さんの家だ。「年貢を納める日から私に来て見ると言つて呉れた。」。場所は、小諸新町の坂を下りると、浅い谷があるが、細いながれを隔てて水車小屋と対した所にある。庭には蓆を敷きつめ、粃を山のように積んで、辰さん兄弟がしきりと働いていた。かねて懇意になっている辰さんの父親に伴われて、暗い家のなかに入った。猫の入物とかで、蓆でつくった行火のようなものが置いてある。しるしばかりの手みやげを隠居は床の間の神棚に供え、鈴を振りならす。炬燵にあたりながらいろいろな話をする。そのうちに外で、辰さんの『定屋さんになア、来て御呉んなんしよつて、早く行つて来て呉れや』という声がする。隠居と談笑しているところへ、50がらみの男がやってきた。黄色い真綿帽子をかぶり、じみな羽織を着ている。『定屋さんですよ。』と辰さんが呼んだ。地主は家の中に入って炬燵に身を温めながら待つ。外では、辰さんが「年貢のしたく」を始めた。地主も家のなかから出てくる。南窓の外にある横木によりかかつて、寒そうに袖口をかきあわせ、われとわが身を抱き温めるようにして、辰さん兄弟が用意するのを待つ。

『どうで御座んすなア、粃の造へ具合は。』

と辰さんに言はれて、地主は白い柔かい手で粃を掬つて見て一粒口の中へ入れた。

『空穂が有るねえ。』と地主が言つた。

『雀に食はれやして、空穂でも無いでやす。一俵造へて掛けて見やせう。』

地主は掌中の粃をあけて、復た袖口を掻き合せた。

辰さんは弟に命じて粃を箕に入れさせ、弟はそれを円い一斗榊に入れた。地主は腰を

曲めながら、トボといふもので其柵の上を丁寧撫で量つた。

『貴様入れろ、声掛けなくちや御年貢のやうで無くて不可。』と辰さんは弟に言つた。

『さあ、どつしり入れろ。』

『一わたりよ、二わたりよ。』と弟の呼ぶ声が起つた。

六つばかりの俵がそこに並んだ。一俵に六斗三升の粃が量り入れられた。辰さんは棧俵を取つて蓋をしたが、やがて俵の上に倚凭つて地主と押問答を始めた。地主は辰さんの言ふことを聞いて、目を細め、無言で考へて居た。……

……辰さんは俵に足を掛けて藁縄で三ところばかり縛つて居た。弟も来てそれを手伝ふと、乾いた縄は時々切れた。『俵を締るに縄が切れるやうじや、まだ免状は覚束ないなア。』と水車小屋の亭主も笑つて見て居た。

『一俵掛けて見やせう。』

『いくらありやす。出放題あるは。十八貫八百一』

『これはた魂消た。』

『十八貫八百あれば、まあ好い粃です。』

『俵にもある。』

『左様です、俵にもありやすが、それは知れたもんです。』

『おらがとこは十八貫あれば可いだ。』

『なにしろ坊主九分混りといふ粃ですからなア。』

人々の間に斯様な話が交換された。……

『どうだいお前の体格ぢや二俵位は大丈夫担げる。』、そうと地主に言われた辰さんの弟が、一俵ずつ両手にかかえて持ちあげたりして戯れるが、もう小作米の徴収は終つた。『まあ、お茶一つお上がり。』と言われて地主は家のなかに入るが、同じく勧められた藤村もなかに入る。炬燵にあたる地主の前に酒徳利の包みが解かれる。俵づめを終えたときに、辰さんの弟が気をきかせて買いに行つてきたものだ。『六俵の二斗五升取りですか。』という辰、『二斗五升つていうことが有るもんか。四斗五升よ。』という隠居、『四斗……』と口ごもる地主、『四斗五升じゃないや。四斗七升サ。左様だ一』という隠居、『四斗七升？』という地主、『あゝ四斗七升か。』と言ひすてて出ていく辰さ

ん。このような言葉のやりとりがあった。やがて炬燵のまわりに集まる。隠居が、布団の上に古い炬燵板をのせ、そこに大井にこんにゃくと油揚げの煮つけを盛って出した。小皿にはとうがらしの袋も添えられている。盃を古いきれでふき、酒は湯沸しに入れて勧める。『冷ですよ。燗ではありませんよ一定屋様は是方で被入つしやるから。』と隠居が気軽な調子で言う。地主は、煙管を炬燵板の間にさし込み、冷酒をなめなめ隠居の顔をながめて、『斯ういふ時には婆さんが居ると、都合が好いなア。』という。地主の顔には初めてかすかな笑みが上った。

ここには小作米領収の様子が描かれている。小作米の品質、俵装、量をめぐっての地主と小作人のやりとりはあるが、おだやかである。隠居は、はじめに、上州と信州の百姓の比較などから、農具のこと、地主と小作人の関係などを話した。新町あたりの小作人の間に小さい“同盟罷工”ともいうべきことが時々もちあがる。このことを隠居の話から知る。「隠居に言はせると、何故小作人が地主に対して不服があるかとふに、」として、つぎのように記している。この辺では、百坪を一升蒔きといい、一ツカを三百坪に算し、一升の粃は二百八十目に量って取り立てる。一ツカといっても実際には三百坪はない、三百坪なくて取り立てるのはその割で取る、地主と半々に分けるところは異数なくらいだ。⁽¹⁴⁾このようなことのために、「そこで小作人の苦情が起る。」が、「無智の小作人」は、地主に対して、いろいろなところで、人の知らない復讐をする。それは、「俵の中へ石を入れて目方を重くし、俵へ霧を吹いて目をつけ」、「稲の穂を顧みないで藁を大事に」する、その他いろいろないたずら、であり、これによって地主を苦しめる。そして、「斯様なこと

(14) 所三男の「語註」によれば、「何升蒔き」というのは、地方農民の間での、昔ながらの播種量による田畑の広狭を知る慣習であるが、佐久地方あたりでは、一升蒔きは百坪に相当する。他方、ツカとは稲の収量である。ここでは一ツカとは三百坪である。すなわち、1反歩3升蒔き、その収量1ツカである、という。（（2）と同一書624ページ）。

をしたところで、結局『三月四月は食ひじまひ』だ。』。これが、藤村の地主・小作人の関係についての最もまとまった描写の箇所である。ここには、両者のきびしい緊張関係は稀薄である。それどころか、それにつづいて、『しかし私の時には定屋様（地主）がお出なさると、必と一升買つて、何がなくとも香の物で一杯上げるといふ風でした。今年は倅に任しときましたから、彼奴また奈何な風にするか……私の時には昔から左様でした。』という隠居の言葉を記している。

4 『千曲川のスケッチ』における農村・農民把握の特質

藤村が信州小諸に来たのは、明治32年4月であつた。その第一詩集『若菜集』の刊行（明治30年8月）によって、詩人としての名声を確立していた藤村はひきつづき詩集を刊行していき、第四詩集『落梅集』を明治34年に刊行している。このように詩人としての仕事をつぎつぎに世にとうたが、この第四詩集をもって詩人としての創作活動ははやくも終わってしまうのである。『合本詩集』初版の序（明治37年）では「遂に、新しき詩歌の時は来たりぬ。そはうつくしき曙のごとくなりき。…」と高らかに謳っているが、この時には詩の創作はしていない。年譜によると、38年4月に、『破戒』完成までの生活費の借金（150円）をして小諸義塾を退職し、上京する。⁽¹⁵⁾ この7年の年月を過す間に、「私の心は小説の形式を撰ぶやうに成つた」という「序」におけることばは、まさしく、詩人から散文家への転換をみずから語るものである。この詩人から散文家・小説家への転換とともに、それに先だつ詩人としての変化がみられる。⁽¹⁶⁾ 第一詩集『若菜集』の詩は、たとえば、「まだあげ初めし前

(15) 「年譜」『明治文学全集69 島崎藤村』 1972年 筑摩書房 434ページ。

(16) この点は、中野新治「『落梅集』—藤村詩の方法とその終焉—」、伊東一夫編『島崎藤村—課題と展望—』 1979年 明治書院 所収 を参照。「感情的に流れるような七五調から、重厚な五七調に変」った（瀬沼茂樹）というのが、共通の理解になっているがごとくである。なお、掛川俊夫氏は東京大学文学部卒業論文（1941年12月）にお

髪の 林檎のもとに見えしとき 前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり
 やさしく白き手をのべて 林檎をわれにあたへしは 薄紅の秋の実に
 人こひ初めしはじめなり わがこゝろなきためいきの その髪の毛にかゝ
 るとき たのしき恋の盃を 君が情に酌みしかな 林檎畠の樹の下に お
 のづからなる細道は 誰が踏みそめしかたみぞと 問ひたまふこそこひしけ
 れ」(「初恋」)や、「をとこの氣息のやはらかき お夏の髪にかゝるとき を
 とこの早きためいきの 霞のごとくはしるとき をとこの熱き手の掌の
 お夏の手にも触るゝとき をとこの涙ながれいで お夏の袖にかゝるとき
 をとこの黒き目のいろの お夏の胸に映るとき をとこの紅き口唇の お
 夏の口にもゆるとき 人こそしらね嗚呼恋の ふたりの身より流れいで
 げにこがれるども慕へども やむときもなき清十郎」(「四つの袖」)にみられる
 ように、叙情的詩情に満ち満ちているが、最後の詩集『落梅集』においては
 異なっている。すなわち、「昨日またかくてありけり 今日もまたかくてあり
 なむ この命なにを齷齪 明日をのみ思ひわづらふ いくたびか栄枯の夢の
 消え残る谷に下りて 河波のいざよふ見れば 砂まじり水巻き帰る ……」
 (千曲川旅情の歌)における、「その想念には、多少ともニヒリスティックな
 傾き」、あるいは、「小諸なる古城のほとり 雲白く遊子悲しむ 緑なす蘼蕪
 は萌えず 若草も藉くによなし しろがねの衾の岡辺 日に溶けて淡雪流る
 あたゝかき光はあれど 野に満つる香も知らず 浅くのみ春は霞みて
 麦の色はつかに青し 旅人の群はいくつか 畠中の道を急ぎぬ 暮れ行け
 ば浅間も見えず 歌哀し佐久の草笛 千曲川いざよふ波の 岸近き宿にのぼ
 りつ 濁り酒濁れる飲みて 草枕しばし慰む」(「小諸なる古城のほとり」)に

いて、「『若菜集』から『落梅集』に至る間に詩から散文への移行を想はせる変化が生
 じて来ている。」「[『若菜集』の代表としての]『醉歌』は七五調であり、『千曲川旅情
 の歌』は五七調である。」と夙に指摘している(掛川俊夫『島崎藤村論』農村文化協会
 長野県支部 1946年、30、33ページ)。

おける「否定的心情」であり、他方、⁽¹⁷⁾「朝はふたゝびこゝにあり 朝はわれらと共にあり 埋れよ眠行けよ夢 隠れよさらば小夜嵐 ……」(「労働雑詠」)における、空疎ともいふべき勤労の雄叫び、へという変化である。そして「炉辺」という、『落梅集』にはないが、改刷版『藤村詩集』(合本)には、⁽¹⁸⁾『落梅集』のなかに入っている、この詩は、その到達点を示すものといえよう。⁽¹⁹⁾

炉辺

散文にてつくれる即興詩

あら荒くれたる賤の山住や顔も黒し手も黒しすごすごと林の中を帰る藁草履の土にまみ
れたるよ

こゝには五十路六十路を経つゝまだ海知らぬ人々ぞ多き

炭焼の烟をながめつゝ世の移り変わるも知らで谷蔭にぞ住める

蒲公英の黄に落の花の白きを踏みつゝ慣れし其足何ぞ野獣の如き

……

ここでは、形式において韻文＝詩そのものがすでに破綻をしていることが示されている。そして、ここでうたわれているのは勤勉ではあるが、貧しく、泥・土にまみれた、「粗野」な農民の姿である。そして、その姿は、『千曲川のスケッチ』で描写される人々のそれから連っている。それは、「私は又、斯の土地で、野蠻な感じのする女に遭遇ふこともある。」(10ページ)、「斯の山の上で、私はよく光沢の無い茶色な髪の娘に逢ふ。どうかすると、灰色に近い

(17) 伊藤信吉「藤村の詩的生涯」『藤村詩集』(角川文庫) 1970年 261～262ページ。

(18) 「『労働雑詠』に示されたワーズワースばりの農民讃歌は、現実を無視した観念過剰の失敗作と評されるのだが、……」(前掲(16) 中野論文 225ページ)。

(19) 『藤村全集 第1巻』筑摩書房 1966年 524～525, 531～532ページ。なおこの詩について、藤村は、「明治三十九年の後になつて、東京より上州磯部温泉へ身を養ひに行つた時の作。浅間の麓のことを書いたもの…。この散文詩は、太田水穂君が島木赤彦君と共に合著の歌集『山上湖上』を出される時、いさゝか両君の新しい出発を祝する意味で、序として贈つたものであつた」(同書 506ページ)と述べている。

のもある。草葺の小屋の前や、桑畠の多い石垣の側なぞに、左様いふ娘が立つて居るさまは、いかにも荒い土地の生活を思はせる。」(9ページ)、「私の側には、青々とした菜を負つて帰つて行く子供もあり、男とも女とも後姿の分らないやうなのが足速に岡の道を下つて行くもあり、左様かと思ふと、上着りのまゝ細帯も締めないで、まるで帯とけひろげのやうに見える荒くれた女が野獣のやうに走つて行くのもあつた。」(84ページ)などにみることができであろう。

藤村がここで到達した佐久の農民の像は、勤勉であるが労苦と貧困、そして「粗野」という特性をもつものとしてのそれであるが、そのような特性は自然のきびしさに由来するものであると藤村はしている。このスケッチの各所に描出される人々の生活のきびしさは、もっぱら自然のそれに規定されるものとしている。農民をとりまく社会的経済的条件への言及はない。たとえば、「収穫」における描写は農民の自然とのきびしい対峙とそれからの緊張感にあふれた好文章である。しかし、ここにはこの農民の生活を取りまく社会的緊張はない。また、「小作人の家」は、小作米の収納の様子を詳細に描いた興味深い箇所である。そこには、地主と小作人のあいだには、一定のかけひき、やりとりが描かれている。しかし、両者間には緊張感は稀薄である。伊東一夫氏は、藤村が「身近に自分の生活と直結した体験として農夫の現実生活に触れたのは小諸時代であつた。とはいえ、その現実生活のきびしさが、資本主義的社会特有の階級社会的現実として彼に認識されたのではなく、原始的、野性的、本能的な人間の生態即ち人間的な自然または生活形態として、むしろ生理的、驚異的に体感されているところに、藤村における人間的な自然の発見があるといえるであろう。」とされているが、⁽²⁰⁾『千曲川のスケッチ』にあつては、農民の苦しみはなによりも苛酷な自然条件のもとでの生産にあるとしているのである。

(20) 前掲(1)伊東一夫『島崎藤村—近代文学研究方法の諸問題—』253ページ。

これをして、藤村の農村・農民把握の限界といえは限界といえるであろう。しかし、この叙情詩人をしてのその農村・農民観察の努力こそ、藤村をして『破戒』という社会小説をもって、小説家としての出発をなさしめたものであろう。伊藤信吉氏は、『夏草』（明治31年12月刊行）に収録されている長篇対話詩「農夫」について、これの「日清戦争」後の社会的雰囲気と国民感情との関連に触れた後、「だがそれは同時に日本資本主義の発展の一過程でもあり、当時は軽工業を中心とする産業革命が急速に遂行されつつあった。日本資本主義のこの基本的趨勢は、次で重工業中心の産業革命へと移行し、…『日露戦争』へと突きすすんでいった。『農夫』はこのような趨勢を背景にして作られたのである。」と、その時代的背景を記している。『千曲川のスケッチ』には、その時代を直接語る箇所はない。しかし、そこを貫いている「憂鬱と灰色」⁽²¹⁾（伊東一夫）⁽²²⁾は、自然的風土的なそれのみではなく、時代的「憂鬱と灰色」の反映でもあったろう。「奥書」の、「もし明治二十年代の文学があつた調子で進むことが出来たら、その発達には見はるべきものがあつたらうに、それが最初のやうな純粹を失ひ、新鮮を失ふやうになつて行つたに就いては、種々な原因がなくてはならない。」（590ページ）、「おそらく二十年代の末から三十年代のはじめにかけては、明治文学者の生涯の中でも特に動きのある時代で、……」（591ページ）は、『千曲川のスケッチ』の時代的認識を表現しているものといえよう。いずれにしても、われわれ社会経済史の立場からみると、この書での描写、とくに、農民の働く様子・情景は、そして、地主の小作米領収の様子などは、当時のことを示す貴重な描写であり、歴史研究の一つの資料となるものである。

（1986年2月28日）

(21) 伊藤信吉「総論 島崎藤村—私の中の一人の作家—」, 伊藤信吉編『現代のエスプリ 島崎藤村』1967年 至文堂 所収 17~18ページ。

(22) (20) と同一書 760ページ以下。